

草原の国モンゴルの首都の大気汚染の状況 依頼講演

【発表番号】 G1008

【登録タイトル】 モンゴルの首都ウランバートルにおける汚染状況の可視化

【一般向け解説概要】

モンゴルは1991年の民主化以来、急激な経済発展により人口の約半分が首都ウランバートルに集中するようになった。この人口密集化により首都では、車の増加による排気ガスや定住化した遊牧民の移動式テントから発生する石炭燃焼灰により大気環境が悪化している。更にモンゴルの冬季は -20°C ～ -30°C になるため火力発電所から石炭燃焼売灰が首都に飛散し大量のсмоッグが発生している。我々は平成19年から首都の大気汚染の測定を行っているが、今回はこれまでの分析結果をまとめてモンゴルの首都の大気汚染の状況を報告する。

【発表者 (○; 登壇者/下線; 連絡担当者)】 都城高専 ○森茂龍一

宮崎県都城市吉尾町 473-1、0986-47-1271 あるいは 47-1272 morimo@miyakonojo-net.ac.jp

都城高専は、平成19年からアジア砒素ネット、宮崎県環境科学協会そしてモンゴル科学技術大学と共同で、モンゴルの首都ウランバートルにおける大気状況を把握するために市内数カ所で大気中の揮発性有機化合物や粉塵（石炭燃焼灰）などの大気環境測定を継続的に実施している。これまでにウランバートル市の大気は、日本の環境基準をはるかに超えた高濃度の揮発性有機化合物（VOCs）を含んでいることを明らかにした。さらに、冬期の降雪の化学分析を行った結果、水銀、カドミウム、鉛、ヒ素、クロム等の有害な重金属を検出した。

本研究の目的は、大気環境を中心に水質等のウランバートル市の環境状況を把握し、モンゴルの首都の汚染状況を可視化することにある。更に、ウランバートル市における基礎的な環境分析データを作成し、得られた知見をもとに市民の環境意識の向上を図るため環境評価の情報をわかりやすく発信することである。



写真1. ウランバートル市のсмоッグとフィルターに付着した大気中の石炭燃焼灰